
BLEACH 異端者の来訪

朱羅夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLEACH 異端者の来訪

【Nコード】

N3231Z

【作者名】

朱羅夜

【あらすじ】

BLEACH」が大好きな中学2年生、獅王誠は、その夜パソコンで「BLEACH」のアニメを見ていた。

明日も学校だと溜息をつきながら、アニメを停止してパソコンを閉じようとしたときだった。

突然光りだしたパソコンに吸い込まれ、誠は姿を消してしまう。そして目覚めたそこはなんと……「ここって、まさか空座町？」

プロローグ

薄暗い部屋の中で、中学生ぐらいの男の子がパソコンに向かって座っていた。

パソコンの画面には最近ハマっているアニメ、「BLEACH」が流れている。

「ゴールデンでやってる割には流血多いよなあ……」

そう言いながらも、面白い事に変わりはない。

マンガも現在連載中の最新刊まで取り揃えてあり、部屋の隅にある本棚に並んでいる。

男の子は、部屋の時計を見て溜息をついた。

「もう2時か……明日も学校だし、もう寝ようかな」

まだ途中だったアニメを停止し、パソコンを閉じようとしたときだった。

突然、パソコンの画面が目が痛くなるほどの強烈な光を発した。

「うわっ！」

次の瞬間、男の子はパソコンの画面へと吸い込まれていった。

来る異端者は、その世界で、何を見て、何を感じるのだろうか……。
彼の者「獅王誠」に幸あらんことを……。。

第1話 目覚めたそこは……（前書き）

初めまして、ブリーチの二次小説を書いていく者です。
ちまちまやってくのですよろしくです

第1話 目覚めたそこは……

あの不思議な現象から目が覚めてみると、俺は意識を失う前と同じ部屋で目覚めた。

間抜けにも、椅子から倒れた格好である。

足は天に、手は地についており、まるで何かのエクササイズかのような恰好だ。

腰が痛いと思鳴を上げる前に、立ち上がった。

「なんだったんだ？ あれ……」

不思議に思いながらも、部屋の時計を見る。

時刻はまだ午前6時。学校に行くには余裕がある。

「久々に遅刻しないってのもいいかもな」

遅刻常習犯である俺は、遅刻しない俺を見てクラスの奴らが驚く姿を想像し、ニヤリと笑った。

いつものように制服に袖を通すと、ある違和感が沸いた。

「あれ？ これ俺の制服じゃない」

俺の通う学校の制服は、上下黒の学生服だ。

しかし、今袖を通したのは濃いグレーとそれと同じブレザータイプの服だった。

「なんなんだ？」

不思議に思いながらも、とりあえず制服を着て一階に降りた。居間のリビングには、メモ用紙と朝食が置かれている。

「ん？」

・・・メモ・・・

誠へ。

仕事で海外へ行くことになったのでよろしく。

ガス代と光熱費、電気代はお母さんの口座から落ちるけど、食費はリビングのテーブルの上にあります。

追伸。

親がいないからって学校をサボらないように。

「は？」

なんだよこれ、と誠はつぶやいた。

一見ふつつのメモのように思えるが、俺はそうは思わなかった。

「ただのパートが海外出張とかねえだろ……」

母子家庭である俺は、母さんのパートと、離婚した父さんからの養育費でこの家を支えている。

だから母さんが「海外」に行くことなんてまずありえないのだ。

おかしい、俺はすぐに気が付いた。

制服の事もそうだが、このメモで確信した。

「俺、めっちゃやばいんじゃない？」

制服の胸ポケットに入っていた生徒手帳を取り出すと、見覚えのない校章と学校名。

「なんだ？ 空座中学…？ ってまさか……」

俺はパソコンに吸い込まれた事を思い出していた。

確かあの時見ていたアニメは今いる世界と同じ物だ。

「巻き込まれた？ そんなばかな、アニメじゃあるまいし」

まあ、ここはアニメと漫画の世界なんだけどさ…。

「まっ、いつか、遠目から井上や乱菊さんでも眺めてれば」

あ、でも乱菊さんは見えないか、死神だし。

そんな軽い考えを持ちながら、俺は空座中学へと向かった。

どうしてこうなった。

俺は今現在、学校へ向かう途中だ。

しかし、なぜ、どうして、こうなったんだ。

事の起こりは数分前、何故か覚えている学校までの道のりを歩いていると、見覚えのないオレンジ頭が前を歩いていた。

あれはまさか、この物語の主人公ではなかるうか。

あまりの嬉しさに声をかけようとしてみた俺だが、すぐにその足は止まった。

どう見てもアレな方々がこの物語の主人公、黒崎一護を取り囲んで

いたからだ。

黒崎は面倒くさそうに頭を描いて路地裏を指さした。取り囲んでいるやつらは、ニタニタと気持ち悪い笑みを浮かべて路地裏に入っていく。

確かあそこは、建物の裏手が少しだけ空き地のようにになっているから、そこでやるんだろうな。

俺は介入すべきか否かで暫し立ち止まり、悩んだ。

すると、その路地裏にめちやくちやでかい男が入って行った。

「あれは…茶渡泰虎？」

めちやくちやでかい男、茶渡は路地裏に入っていく、すると悲鳴があがり、数名の男が顔から血を流して出てきた。

「ば、化け物だ！」

「逃げるお！」

どうやら介入しなくても済みそうだ。

「だけど、それじゃ面白くねえ」

せつかくブリーチの世界に来たんだ、楽しまねえとな
俺は意気揚々と路地裏に入り込んだ。

第2話 小さくて変な奴

一護視点

今日は久々に早起きしてみたら、いつもみたいにあのバカ親父が部屋に乗り込んできた。

最近はそのバカ親父も学習したのか、今日は少しばかり時間がかかった。

まあ、俺の勝ちだったんだけどな。

朝飯を食べた後、学校に向かっているところの間ゲーセンでからんできた奴が仲間を呼んでやってきた。

めんどくさいとは思ったが、このまま学校に行けるわけもなく、俺は近くの路地裏の空き地でなら相手してやると言った。

で、空き地に入ったら入ったでいきなりかかってきやがった。

まったく、めんどくさいったらありやしねえ。

5、6人倒してからチャドが来た。

そういえば、この間のゲーセンの時チャドも一緒にいたんだっけ…。

まあ、そこまではよかったんだ。

そしたら突然アイツが割り込んできたんだ。

誠視点

とりあえずあいさつ代わりに空き地を塞いでいた奴3人をぶちのめ

した後、意気揚々と空き地に入ったら思惑通り黒崎一護と茶渡泰虎がいた。

それで二人とも「誰だ？」って顔で俺のこと見てやがる。制服が同じなのに、ちよつとした感動を覚える。

「なあに寄つてたかつて二人相手にしてんだよ、男は黙ってタイムンだろうが」

「誰だっ！ てめえ！」

「大勢で二人を相手するようなクズに教える名前なんざねえよ、この二人、とりあえず加勢すっけどよ、後3分で片付けないと遅刻だぜ」

「一護、アイツが誰かは後で聞けばいい、見たところ同じ学校みただ」

「そんなこと気にしねえよ、早く終わるならそれにこしたこたあねえ」

カスやクズを放置して話している俺たちに、バカが痺れを切らしたのか、走ってきた。

「このドチビがああああああ！」

「シャーラップ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

禁句を発言したバカに俺はサマーソルトをお見舞いした。

一応元の世界じゃ色々やってたからな、これぐらい朝飯前だ。

サマーソルトで地に落ちた相手に俺は踵落としを決める。

殺しちゃいねえけど多分鼻はつぶれたな。

「えげつねえ」

「やりすぎだ」

「俺をチビって言うやつは誰だろうと潰す、この世で俺に会ったことを後悔しながら逝け」

「「字が違う」「」

二人に突っ込まれながら、俺たちはカップラーメンが早く出来上がるより片付けると、そろって学校に向かった。省略したけど、とりあえず自己紹介はした。

茶渡視点

一護の助けに入って少しすると、変な奴が割って入ってきた。最初は、その背の低さから小学生かと思ったが、どうやら俺たちと同じ制服を着ているところを見ると同級生か、先輩だろう。

先輩だった場合は、どう対処すればいいのか困る。

「なあに寄ってたかって二人相手にしてんだよ、男は黙ってタイムンだろうが」

ソイツは俺と一護を取り囲んでる不良にそう言った。

男は黙ってタイムン……そういう訳でもなさそうだが……。

「誰だっ！ てめえ！」

「大勢で二人を相手するようなクズに教える名前なんざねえよ、その二人、とりあえず加勢すっけどよ、後3分で片付けないと遅刻だぜ」

そうやってソイツは笑った。俺もそれには同意だ、学校に遅刻するのは良くない。

「一護、アイツが誰かは後で聞けばいい、見たところ同じ学校みただ」

「そんなこと気にしねえよ、早く終わるならそれにこしたこたあねえ」

悠長に話しをしていると、不良の一人がソイツに殴り掛かった。

「このドチビがああああああ！」

「シャーラップ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ソイツはどこぞの戦隊物よろしくサマーソルトを決めると、倒れた相手に踵落としを食らわせた。

正直あれは見るに堪える、グロテスクだ。

それを見た一護が、ポツリと漏らした。

「えげつねえ」

「やりすぎだ」

その辺りにいた不良を投げ飛ばして言うと、ソイツは無表情で言った。

「俺をチビって言うやつは誰だろうと潰す、この世で俺に会ったことを後悔しながら逝け」

「「字が違う」」

一護と声をかぶらせながら言っただけは見た物の、ソイツはお構いなしに不良たちに突っ込んでいった。おかげで遅刻はしなさそうだ。

学校へ向かう途中、とりあえずソイツの名前を聞くことにした。

「名前は何という？」

「俺か？ 俺は獅王誠、獅子の獅に、王様の王、そこで新撰組の誠で獅王誠、よろしくな」

見た目の割りになかなか格好良い名前だと思った。

「黒崎一護だ、一に護るって書いて一護、よろしくな」

「茶渡泰虎、二人みたいに名前を説明するのは難しい、一護からはチャドって呼ばれている、好きに呼んでくれ」

「じゃあトラさんだな」

ふむ、トラさんか、初めて呼ばれたな。

「トラさん？ 俺たち同い年じゃねえのか？ 何で”さん”付なんだよ」

「いや、この中で一番老けてそうじゃん、なんとなく」

「なんとなくって、チャドに失礼じゃねえか」

「構わん、好きに呼べと言ったのは俺だ、一護」

突っかかりそうな一護を止め、言う。

「まっ、チャドがいいならそれでいいか」

「そういう事、ま、俺のことも好きに呼んでくれていいよ、さっ
「ぜ」

「ああ」

「おっ」

「じつじつとじつじつもの日常に、この小さくて変なやつが混じった。

第2話 小さくて変な奴（後書き）

本当は一護視点でやろうとおもったけど、茶渡さんでめちゃいました。

第3話 曇り空と出会い

その日は、どんよりとした雲が空に重くのしかかるようにして流れていた。

気分が悪いと思いながら、俺は学校に行く準備に取り掛かった。あの日から俺は一護とトラさんの三人でよく行動するようになった。今じゃあいつらは俺にとって最高の親友だ。

家を出ると、雨が降っていた。

閉めた玄関を開け、傘をとるともう一度玄関を施錠して俺は学校に向かった。

なんだか今日は、良くないことが起こりそうだ。

いつものように学校へ向かっていると、ある異変に気が付いた。

「こんなところに、神社あったか？」

赤い鳥居の向こうには、高い階段があり、その先にも鳥居がある。俺は好奇心からか、その神社に行ってみることにした。

息を切らしながら階段を上りきると、そこは古びた神社だった。

「気味悪いな……」

神社の社の扉は、少しだけ開いており、その中の闇を覗かせる。好奇心は猫を殺すと言う物の、俺は気になって仕方がなかった。中に入ると、何もなかった。

しかし、そこには本来あつてはならないものが存在していた。
抜き身の刀が、突き刺さっていたのだ。

刀身はボロボロで、今にも折れそうなその刀を、近くで見ている。そして、俺は刀の柄をゆっくりと握り、折れないように刺さっている部分を抜いてみた。

ずっしりとした重さが腕に伝わり、落とすそうになりながらも俺は感動していた。

ブリーチの世界に巻き込まれたとはいえ、設定上は同じ日本だ、法律も同じであれば文化も同じ、真正銘の現実になっているのだ。

抜いてみたのは良いものの、どうすれば良いかわからず、俺は刀を置いて学校へ向かった。

案の定、遅刻した。

昼休み、教室で自作の弁当を食べていると、一護とトラさんがやってきた。

「よっ、誠」

「む」

「一護とトラさんか、どうした？」

「どうしたじゃねえだろ、何で遅刻なんかしたんだよ」

一護は呆れ顔で、トラさんはいつも通りの無表情で言った。

「何かあったのか？」

「いや、寄り道してたら遅くなっただけ」

「寄り道い？ お前んとこの通学路って別に寄り道するようにならなかっただろ？」

「……………それが今朝さ……………」

俺は今朝あったことを二人に話した。

すると一護は「また霊的なもんじゃねえのか」と言い、トラさんは「刀か、危険だな、警察に連絡したほうがよくないか？」と言った。

「うーん……………なんていうか、不思議な感じがしたんだよな、いつもそこにあるような感じじゃなかったんだ」

「なんだそれ？ それより今日俺の家こねえか？ 妹が誕生日なんだ」

「妹？ 一護に妹なんていたのか」

知っているけど、一応知らないふりをする。

一応巻き込まれる前は最新刊まで読んでたからな……………。

「遊子と夏梨ってんだ、双子なんだけどよ、今日はその二人の誕生日って訳」

「トラさんも行くのか？」

「そのつもりだ」

「じゃあ遠慮なく行かせてもらおうよ、手土産もって」

「期待してる」

放課後、一度帰宅した俺は台所にいた。

「さて、とりあえずこんなもんか？」

皿の上にはケーキ屋などでよく見るホールケーキがあった。

チヨコの部分には「誕生日おめでとう」と書いてある。

これは全て俺の自作だ。

素人でも案外うまくいくものだな、本見ながらだけど。

味見は完璧、包装し、袋に入れてから俺は家の戸締りをして黒崎家へと向かった。

俺の家から黒崎家までは、結構時間がかかる。

20分程だが、いつもは自転車なので歩きだと相当遠く感じる。

「クロサキ医院」の看板が見えたところで、俺は人影を見つけた。

「トラさん」

「誠か、丁度だな」

「そうだな、んじゃいこつぜ」

「ああ」

二人揃って一護の家のインターホンを鳴らすと、「はい」と声が聞こえて一護が出迎えた。

「いらっしやい、上がってくれ」

「おじゃまします」

「おじゃまする」

靴を脱いで差し出されたスリッパを履くと、リビングに通された。

「おにーちゃん？ だれだったー？」

「帰ってきて話しただろ、学校の友達だよ」

一護に駆け寄ってきたのは一護によく似たオレンジ髪の少女とその後ろにいる少し目つきの悪い黒髪の少女だった。

「初めまして、黒崎夏梨です。」

「黒崎遊子です、よろしくおねがいします!」

「獅王誠だ、よろしくな」

「茶渡泰虎、よろしく」

自己紹介もそこそこに、二人の誕生会はスタートした。暖かい家族だと思った。

ブリーチの世界で家族と呼べる存在がない俺にとって、黒崎家は羨ましかった。

だけど俺にだって、この世界で親友と呼べるやつができた。
それだけで、俺は満足だ。

第4話 地味で暗くていつも下向いてる女の子ってだいたい美人だよな

黒崎家の誕生会の翌日、いつものように通学路を歩いていた俺は、昨日見た神社を探していた。

「やっぱ、どこにもねえよなあ」

最初から期待していなかっただけに、別にこれといって絶望感を味わう訳もなく、当然のように受け入れた。
学校に近づくにつれ、見慣れたオレンジ頭が見えた。

「おーっす一護」

「ん？ 誠か、おはよ」

俺と一護は他愛無い話をしながら学校へと向かっていく。
原作への介入はまだ数年かかる、だけどコイツはあの時から霊が見えてるんだ。

気は抜けない、きっと俺にも何かが起こるはずだ。

藍染の一件から、一護と仲の良かった主要人物にも霊が見えるようになったんだから。

学校に到着すると、トラさんが門の所で待っていた。
相変わらずデカイ。

「おっすトラさん」

「む」

「おはよ、チャド」

三人そろって学校に入るなんて俺たちにとつちやお馴染みで、周囲もそれに慣れてきている。

「黒崎イイイイ!!!!!!」

ただ一つ、このお馴染みだけはご遠慮願いたい。

駆け寄ってきたのはジャージ姿の男、右手には竹刀を持った体育教師。

名前は忘れたけど、いつも一護を目の敵にしている、多分髪の色についてだ。

「何度も何度も言っているだろう！ 髪の色を黒にしてい！」

「あー、それなんですけどねー？ 先生、親父に髪を黒くしろって言われたからそうしようとしたら、親父がお袋からもらった髪の色を変えるなんて許さんとか言いだしたんで、無理っす」

「なんだその言い訳はあ！ 俺を舐めているのか！」

毎朝毎朝ご苦労なことって、俺はそう思いながら既に5メートルは開いている距離から一護に言った。

「一護、先いくぞ？」

「あつ、ちょっと待ってくれよ、今行くって」

一護は体育教師を無視して俺とトラさんの方に向かってくる。無視された体育教師は震えながら顔を真っ赤にしている。

「この……不良がああああ！」

竹刀を振り回して体育教師が一護に走っていく。

登校してきた奴なんておかまいなしだ、それを見ていた俺は、ある一点に目が行った。

そこにいたのは、同じクラスだけど地味で目立たない女子生徒だった。

今も体育教師が走り出した事に驚いて足を止めている。

あ、当たる。

咄嗟に判断した俺は走り出し、驚いて足を止めている女子生徒を突き飛ばした。

と、同時に背中に「バシン！」とものすごい音がした。

「つてええええ！！！」

「誠！」

「大丈夫か！？！」

一護とトラさんがかけよってきた。

事の一部始終を見ていた生徒達も「痛そう」とか、「バシンって言ったよ、バシンて」とか言っているが、ハッキリ言おう。

「痛いわけエ！　周り見んかい！！！」

睨みを聞かせて体育教師を罵倒、そのまま走り出して俺は体育教師

の顔面に華麗なとび蹴りを見舞った。

「はっ！ 俺はやられたらやり返す男だ、なめとつたら死なすぞワレ」

「お、おい……？ 誠？」

「口調、おかしいぞ？」

「ん？ 気にするな、何か憑いただけだ」

「「字が違うぞ」」

そんなやり取りをしつつも、俺は突き飛ばした女子生徒へと向かう。

「怪我ないか？ 悪かったな、突き飛ばして」

どっちにしろ痛い思いさせちまったなあ、とか自己嫌悪に陥っていると、スカートの砂を払って女子生徒は言った。

「ありがとう」

ドキツとした。

いつも暗くて地味なこの女子生徒は、いつも下を向いているから誰もまともに顔を見たことがないんだ。だから俺は今すごく驚いている。

今日の前にいるこの美人は誰だっ！？

「あ、いや、怪我ねえなら、いいけどよ、何か痛いところあったら保健室いけよ、じゃな」

それだけ言っ て俺は立ち去る。

「護やトラさんに「顔が赤い」とか言われたけど俺は黙ってゲンコ
ッを返してやった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3231z/>

BLEACH 異端者の来訪

2011年12月18日04時45分発行